

ヨハネの手紙第一4章1-3節 「反キリストの霊」

1A 霊の吟味 1

1B 「すべての霊」を信じることへの戒め

2B 多くの偽預言者

2A 神からの霊 2

1B イエス・キリストの告白

2B 肉を取られた方

3A イエスを告白しない霊

1B 反キリスト

2B 今の世

本文

ヨハネの手紙第一 4 章を開いてください。私たちの、ヨハネの手紙第一の学びは前回、3 章を読み終わりました。今晚は、4 章の初めの 3 節をじっくり見ていきたいと思えます。「¹愛する者たち、霊をすべて信じてはいけません。偽預言者がたくさん世に出て来たので、その霊が神からのものかどうか、吟味しなさい。²神からの霊は、このようにして分かります。人となって来られたイエス・キリストを告白する霊はみな、神からのものです。³イエスを告白しない霊はみな、神からのものではありません。それは反キリストの霊です。あなたがたはそれが来ることを聞いていましたが、今すでに世に来ているのです。」私たちは、今晚は「霊」について学んでいきます。そして、霊といっても、偽預言者を動かしている霊もあり、それが反キリストの霊と呼ばれていることについて見ます。

何度となくお分かちしていますが、私は信仰をもってまだ時が経っていない時に、一か月ほど、異端の教会に行ってしまったことがあります。そこにおいて、多くの霊の現象がありました。ほとんどの人が異言を話しました。預言もよくありました。それから、夢も見て、イエスの夢を見たとのことで、それを念写したものを壁に飾っているのも見ました。あたかも神の御霊の現れであるかのように見えたのですが、それがサタンのものであり、その時の私がものすごく高慢になっていたのを覚えています。それから、ものすごい、霊的混乱と束縛の中で苦しんだことをよく覚えています。それが解かれたのは、自分の通っている教会の祈り会で、年を召した姉妹の献げる祈りでした。本当に普通の、素朴な祈りでしたが、私の霊に何か詰まっていたものが、取れて、泉が開かれて御霊が流れ出たのだと思えました。霊といっても、それがすべて神からのものではないことを体験したのです。

私たちは、普段、恩恵を受けているもののありがたさが、その恩恵がなくなった時に気づきます。それは、いつもと変わらない教会の姿であり、いつもと変わらない信仰告白です。イエスが御子キ

リストであるという告白、そしてイエス様の名によって共にいのる祈りであり、そこに留まることが、いかに私たちが悪い者から守られているのか、また悪い者に勝利を与えているかしれません。

前回、使徒ヨハネは、神の命令が何かについて、3章23節でこれが神の命令であると明言していました。「私たちが御子イエス・キリストの名を信じ、キリストが命じられたとおりに互いに愛し合うこと、それが神の命令です。」信じることと、愛すること、この二つが神の命令です。神の命令はこれだけシンプル、単純なのだということを見ることができました。そして、手紙の流れを見ますと、4章では1節から6節までで何を信じるのかということを取り扱い、そして7節から12節において愛することについて詳しく教えてくれています。ですので、1節から3節は、その信仰について教えている前半部分になります。

1A 霊の吟味 1

1 愛する者たち、霊をすべて信じてはいけません。偽預言者がたくさん世に出て来たので、その霊が神からのものかどうか、吟味しなさい。

ヨハネは、「愛する者たち」と語りかけています。手紙の中で、何度となく親愛の情を込めて、そう語りかけていますね。神に愛されているという保障、安心があるからこそ、これから語る警告に耳を傾けることができると分かっています。神は、私たちに対して警告を与えられますが、それと同時に恐れることはありません。恐れることはないからといって、気をつける、警戒する必要はないのだ、とすれば、その人は真実に神のものとしてされているか疑わしいかもしれません。神から与えられている救いの保障と、偽物に対する警戒は両立するのです。

1B 「すべての霊」を信じることへの戒め

初めに、「**霊をすべて信じてはいけません。**」と言っていますね。その前の節、3章24節に、「**神が私たちのうちにとどまっておられることは、神が私たちに与えてくださった御霊によって分かります。**」と言っています。御霊を神が与えてくださったのです。けれども、霊だからといって、すべて神からのものとは限らないということを話しています。鵜呑みにしてはいけないということです。

主を純粋に信じること、心から熱く主を愛することは、大変喜ばしいことです。そこから霊的に識別力が与えられることによって、信仰が成長できます。パウロが、ピリピの教会の人々のために祈っていますが、こう言っています。「1:9-10a 私はこう祈っています。あなたがたの愛が、知識とあらゆる識別力によって、いよいよ豊かになり、10a あなたがたが、大切なことを見分けることができますように。」その純真な思い、熱い愛が、知識と識別力によっていよいよ豊かになります。霊だからといってすべてを信じてはいけないと言われると、疑い深くなりなさいと言われるような気がするかもしれませんがそうではありません。良い物、悪い物を見分けることによって、初めて神に与えられた愛が、ますます豊かにされて、神の似姿に近づいていくことができます。

ヘブル書の著者は、神の教えについて、初歩的なことを「乳」と呼び、そこから進んで神の奥義を知ることを「固い食物」と呼んでいます。固い食物を食べることによって、善悪を見分ける力がつくことを話しています。「5:13-14 乳を飲んでいる者はみな、義の教えに通じてはいません。幼子なのです。14 固い食物は、善と悪を見分ける感覚を経験によって訓練された大人のものです。」固い食物は、じっくりとかまないと食べられません。私たちはとかく、そのじっくりと噛むことをさげようとし、そして、手っ取り早く分かるもの、受け入れやすいものを食べていくことに偏って行ってしまふのです。けれども、なかなか呑み込むことのできない神の真理だからこそ、じっくりと取り組んで、霊的に成長し、見分けがつくようにしていきたいものです。

2B 多くの偽預言者

そして、「偽預言者がたくさん世に出て来た」と言っています。これが、ヨハネが手紙の中で警戒している、グノーシス主義の影響を受けた者たちのことです。2章 18節以降で既に語っていた、「2:18 幼子たち、今は終わりの時です。反キリストが来るとあなたがたが聞いていたとおり、今は終わりの時であると分かります。」26節では、「惑わす者たち」とも呼びました。

サタンは、エバを惑わして以来、神の民とされた者たちに、神からのものではないのに、神からものだとして語る偽預言者を通して、惑わすようにしています。外から罪を犯させるよりも、惑わされた者たちが中から現れることによって、神の民自体が自らを滅ぼしていくように仕向けます。イスラエルの民の宿営の中に、ミディアン人の女たちを送るように助言したバラムが、その典型です。モアブ人の王バラクが、バラムにイスラエルを呪うように金を出したけれども、神がバラムの呪いを祝福に変えられました。そこでバラムは、イスラエルが自らを呪うようなことをすれば、神ご自身から裁かれることを考えたのです。神の民の宿営の中に淫乱と偶像礼拝が入って来たけれども、それをどうすることもできなくなった時に、公然と罪を犯している者を殺して、神の裁きを体現した祭司の子ピネハスが、神から報いを受けました(民数 25章)。黙示録では、ペルガモンの教会が、せかく殉教者を出してまで、サタンの座に抵抗していたのに、「2:14 バラムの教えを頑なに守る者たちがいる」として、つまずきを置く者たちがいることをイエス様が証しておられます。

モーセは、イスラエルの民に警告を与えていました。「申 13:1-5 あなたがたのうちに預言者または夢見る者が現れ、あなたに何かのしるしや不思議を示し、2 あなたに告げたそのしるしと不思議が実現して、「さあ、あなたが知らなかったほかの神々に従い、これに仕えよう」と言っても、3 その預言者、夢見る者のことばに聞き従ってはならない。あなたがたの神、【主】は、あなたがたが心を尽くし、いのちを尽くして、本当にあなたがたの神、【主】を愛しているかどうかを知ろうとして、あなたがたを試みておられるからである。4 あなたがたの神、【主】に従って歩み、主を恐れなければならない。主の命令を守り、御声に聞き従い、主に仕え、主にすがらなければならない。5 その預言者あるいは夢見る者は殺されなければならない。なぜならその人は、あなたがたをエジプトの地から導き出して奴隷の家から贖い出された、あなたがたの神、【主】に対して、あなたがたが

反逆するようにそそのかし、あなたがたの神、【主】が歩めと命じた道から、あなたを迷わせようとするからである。あなたがたの中からその悪い者を除き去りなさい。」しるしや不思議を見せても、それが神の霊によるものとは限りません。その預言者が、ほかの神々に従い、仕えようというのであれば、どんなことがあっても聞き従ってはならないとのことです。それに引き寄せられる誘惑は、まるで魅惑的な女が自分をそそのかすごとくのものであり、なんとしても、主を愛し、主の命令を守るところに留まる必要があります。

預言者は、神のことばを語り、神に立ち返るよう呼びかけるのですが、偽預言者は、その反対のことを神の名で行います。聞いている相手には、心地よい言葉であり、耳障りのよい言葉です。イスラエルにアハブ王がいましたが、アラム王と戦いたいと願いました。ユダの王ヨシャファテに誘いますが、ヨシャファテは、預言者に伺いを立てることを求めます。それでアハブは預言者を約四百人集めました。彼らは、「あなたは攻め上ってください。主は王様の手にこれを渡されます。」と一様に言うのです。ヨシャファテは、これはあまりにも出来過ぎていると感じたので、「われわれがみこころを求めることのできる主の預言者が、ほかにいないのですか。」と尋ねています。ヨシヤアテには、見分けの力があつたのです。アハブは、いるにはいるが、「私は彼を憎んでいます。彼は私について良いことは預言せず、悪いことばかりを預言するからです。」と言いました。自分に良いことを預言する者ばかりを集めていたのです。その悪いことも臆せず預言したのがミカという人でした。彼は、見事にイスラエルがアラムに敗れることを預言しました。アハブ自身もその戦いで死ぬことも予告しました。それだけではありません。主の御座で何が起こったのかも預言したのです。主が、アハブを裁くことをお考えになっていました。その愚かな戦いに出て行かせるに任せ、彼が死ぬことを意図されていました。その中で、ひとりの霊が進み出て、「この私が彼を惑わします。」と言ったのです。方法は、「私が出て行って、彼のすべての預言者の口で偽りを言う霊となります。」ということです。(以上、I 列王 22 章から)

神は時に、ご自分の真理の言葉を受け入れない者たちに、その裁きとして、惑わす者に惑わされるままにされることを行われます。反キリストが終わりの日に現れたときに、神がそうした裁きを行われることを、テサロニケ第二の手紙でパウロがこう話しています。「2:9-12 不法の者は、サタンの働きによって到来し、あらゆる力、偽りのしるしと不思議、10 また、あらゆる悪の欺きをもって、滅びる者たちに臨みます。彼らが滅びるのは、自分を救う真理を愛をもって受け入れなかったからです。11 それで神は、惑わす力を送られ、彼らは偽りを信じるようになります。12 それは、真理を信じないで、不義を喜んでいたすべての者が、さばかれるようになるためです。」不義を喜ぶことを、神の名によって正当化させるような教え、これには警戒すべきです。パウロは、テモテへの手紙第二で、テモテにこう励ました。「II テモ 4:2-4 みことばを宣べ伝えなさい。時が良くても悪くてもしっかりやりなさい。忍耐の限りを尽くし、絶えず教えながら、責め、戒め、また勧めなさい。3 というのは、人々が健全な教えに耐えられなくなり、耳に心地よい話を聞こうと、自分の好みにしたがつて自分たちのために教師を寄せ集め、4 真理から耳を背け、作り話にそれて行くような時

代になるからです。」

エルサレムがバビロンによって滅ぼされることを預言したエレミヤは、多くの反対と迫害を受けました。その迫害者は、王だけに留まらず、むしろ祭司であるとか、神に仕えているような人々でした。そして、エレミヤはもう一つの戦いの中にいました。それは、偽預言者との戦いです。偽預言者が預言をすることによって、民は混乱し、エレミヤの言うことを聞かなくなってしまうのです。しかも、エレミヤが語っていることは、ごく少数派であり、他の大勢はエルサレムがバビロンから解放されることを預言していました。偽預言は、物理的な反対はしなくとも、非常に効果的に神の真理に従わせなくさせるのです。そこでエレミヤは、偽預言者にことについても多くを預言しました。23 章は、15 節以降で長く偽預言者に対する預言を語っていますが、25-29 節を読みます。「25 わたしの名によって偽りを預言する預言者たちが、『私は夢を見た。夢を見た』と言うのを、わたしは聞いた。26 いつまで、あの預言者たちの心に偽りの預言があるのか。心の偽りごとを語る預言者たちのうちに。27 彼らの先祖がバアルのゆえにわたしの名を忘れたように、彼らはそれぞれ自分たちの夢を述べ、わたしの民にわたしの名を忘れさせようと、企んでいるのか。28 夢を見た預言者は夢を語るがよい。しかし、わたしのことばを受けた者は、わたしのことばを忠実に語らなければならない。麦は藁と何の関わりがあるだろうか。——【主】のことば——29 わたしのことばは火のようではないか——【主】のことば——。岩を砕く金槌のようではないか。」イスラエルの民に主の御名を忘れさせようとしています。そして彼らの言葉を藁として、エレミヤの言葉は麦であるとして、つまり、人々がそれを食べて生かすのです。藁は火で燃えて、消えさってしまいます。

新約聖書では、使徒たちが偽預言者や偽教師について警告をしています。いろいろな手紙で警告していますが、その顕著なものは、ペテロ第二とユダの手紙です。その姿はとても似ています。ペテロ第二 2 章から読みます。「Ⅱペテ 2:1 しかし、御民の中には偽預言者も出ました。同じように、あなたがたの中にも偽教師が現れます。彼らは、滅びをもたらす異端をひそかに持ち込むようになります。自分たちを買い取ってくださった主さえも否定し、自分たちの身に速やかな滅びを招くのです。2 また、多くの者が彼らの放縦に倣い、彼らのせいで真理の道が悪く言われることとなります。3 彼らは貪欲で、うまくこしらえた話であなたがたを食い物にします。彼らに対するさばきは昔から怠りなく行われていて、彼らの滅びが遅くなることはありません。」

そして使徒ヨハネは、この手紙、第一の手紙で偽預言者との戦いを書いているのです。「**その霊が神からのものかどうか、吟味しなさい。**」と言っています。吟味するという言葉、これは試すとも訳されるものであり、それが本物であるかどうか、その真価を試すということです。工場で何かの製品が出来たら、いろいろな耐久テストをしますね。火の中を通したり、高い所から落下させたり。そうやって検査して、それで合格になります。同じように、預言が確かにそのとおりのかどうか、しっかり吟味する必要があるのです。

2A 神からの霊 2

その基準をヨハネは 2 節で、こう言っています。「**2 神からの霊は、このようにして分かります。人となって来られたイエス・キリストを告白する霊はみな、神からのものです。**」

1B イエス・キリストの告白

神からの霊、御霊の働きであるかどうかは、「**イエス・キリストを告白する**」ということであります。ヨハネは、既に 2 章で、先に引用した反キリストが多く現れていると言った後で、「2:23 **だれでも御子を否定する者は御父を持たず、御子を告白する者は御父も持っているのです。**」と言っていました。パウロは、コリント第一 12 章で、「**聖霊によるのでなければ、だれも「イエスは主です」と言うことはできません。(3 節)**」と言っています。

けれども、ただイエスが主であると口で言うだけで、それが聖霊によるものなのか？と言いますと違います。「**マタ 7:21-23 わたしに向かって『主よ、主よ』と言う者がみな天の御国に入るのではなく、天におられるわたしの父のみこころを行う者が入るのです。22 その日には多くの者がわたしに言うでしょう。『主よ、主よ。私たちはあなたの名によって預言し、あなたの名によって悪霊を追い出し、あなたの名によって多くの奇跡を行ったではありませんか。』23 しかし、わたしはそのとき、彼らにはっきりと言います。『わたしはおまえたちを全く知らない。不法を行う者たち、わたしから離れて行け。』**」主よ、と言いながら、父のみこころを全く行っていないという事があり得ます。不法を行うことができます。しかも、イエスの名によって預言し、イエスの名によって悪霊を追い出しても、イエス様から、「おまえたちを全く知らない」と断言されることもあるのです。主イエスの名を唱えていれば、それが聖霊によるものとは限らず、いや、唱えているから人々を惑わし、彼らは真理を知っていると思わせていくのです。

では、「**イエス・キリストを告白する**」とは何なのでしょう？イエスが、来るべき世を救う方であることを信じている、ということです。パウロは、エペソで牧会しているテモテが、論争を引き起こす違った教えを持ち込む者たちに困っていた時、このことを話しました。「**I テモ 1:15「キリスト・イエスは罪人を救うために世に来られた。」**という言葉は真実であり、そのまま受け入れるに値するものです。」イエスの名を唱えているから大丈夫なのではなく、この方が罪人を救うために世に来られて、私はその罪人であると告白しているかどうか、であります。イエスの名を唱えていても、他のところに根本的には信頼を寄せているのであれば、それは告白したことにはなりません。結婚式で誓約を交わす時に、「はい」と答えますが、相手の顔も見ず、ただ口で「はい」といったら意味がないように、イエスがキリストであるということ、自分のこととして、つまり自分を罪から救われる方として信じて受け入れることによって、救われます。

2B 肉を取られた方

ヨハネは特に、「**人となって来られた**」と言っています。これは、直訳は、「肉をもって来られた」と

なっています。ヨハネは、手紙で、この方が肉体を持っておられることを紹介するところから、手紙を書き始めています。「1:1 初めからあったもの、私たちが聞いたもの、自分の目で見たもの、じつと見つめ、自分の手でさわったもの、すなわち、いのちのことばについて」肉体であることを、じっくりと確かめることのできる方が、いのちのことばなのだと言っています。ヨハネは福音書において、これを明確にしており、「1:14 ことばは人(直訳:肉)となって、私たちの間に住まわれた。」と言っているのです。神である方が肉体を取られた、これが奥義です。

イエスご自身が受肉された、神であられるのに肉体を取られたという真理は、もちろん、この方が私たちと一つになるためというのが目的の一つです。私たちの間に住まわれたとあるように、神であられる方が、私たちと一つになります。「ヘブル 4:15 私たちの大祭司は、私たちの弱さに同情できない方ではありません。罪は犯しませんでした。すべての点において、私たちと同じように試みにあわれたのです。」そして、その肉体があったからこそ、私たちの罪に対する神の処罰をその肉体に受け、罪のためにいけにえとなることができました。「ヘブル 10:10 このみこころにしたがって、イエス・キリストのからだを、ただ一度だけ献げられたことにより、私たちは聖なるものとされています。」

このことによって、大事なことは、私たちは、キリストに倣う者たちは、この肉体にあって敬虔な生活を行うことができることを教えているのです。罪の行い、肉の行いと言われるものでない限り、神は、私たちの肉体が置かれているところに召されて、そこでご自身が共におられて、そして聖霊の力によって、キリストに似た者として生きることができるといことです。テモテ第一の手紙が、違った教えを持ってきた者たちがいると先ほど、説明しましたが、パウロは手紙の最後で、こう言っています。「6:20b-21a 間違っ「知識(グノーシス)」と呼ばれている反対論を避けなさい。ある者たちはこの「知識(グノーシス)」を持っていると主張して、信仰から外れてしまっています。」それに対抗して、テモテへの手紙では、敬虔にかなう教えを強調しているのです。それは、キリストが肉体を持って現れ、神のみこころにかなう生涯を送られたように、キリストに倣う者たちは、この肉体の生活を歩みながら、神を恐れ敬う生活ができるということです。「だれもが認めるように、この敬虔の奥義は偉大です。『キリストは肉において現れ、霊において義とされ…』(3:16)」とあります。

ですので、ヨハネは、具体的に肉体における行いによって、愛の真実を示すように教えていました。口先ではなく、困っている人に施しをするような具体的なこと、実践が必要であることを教えていました。行いがあることによって、初めて信仰が生きていることが確かなものとされるのであり、肉体における行いが、信仰と切り離せないものなのです。ですから、終わりの時にキリストの裁きの座の前に行く時も、肉体においてしたことに応じて裁かれます。「Ⅱコリ 5:10 私たちはみな、善であれ悪であれ、それぞれ肉体においてした行いに応じて報いを受けるために、キリストのさばきの座の前に現れなければならないのです。」

3A イエスを告白しない霊

そこで、肉体を取られたイエスを告白する霊が、神からのものであるのに対して、そうでないのは、「**反キリストの霊**」であると言っているのです。

1B 反キリスト

^{3a} **イエスを告白しない霊はみな、神からのものではありません。それは反キリストの霊です。**

反キリストと言え、終わりの日に現れる人物で、ダニエル書やマタイ 24 章では、「荒らす憎むべき者」、テサロニケ第二 2 章では「不法の者」、黙示録では「獣」として出てきます。けれども、先ほど読んだヨハネ第一 2 章 18 節では、「**反キリストが来るとあなたがたが聞いていたとおり、今や多くの反キリストが現れています。それによって、今が終わりの時であると分かります。**」多くの反キリストと言っているのです。これは、ギリシア語において、単数と複数で言い換えられていることで分かります。前の方の「反キリストが来る」というのは、特定の一人の人物ですが、多くの反キリストは不特定の多くの人物です。これは、どういうことかということ、サタンが権威と力と位を与える反キリストは終わりの日に現れるが、その反キリストを動かす霊は今も働いていて、それが偽預言者たちによって現れている、ということです。パウロはそれを、テサロニケ第二 2 章で、「不法の秘密」と呼んでいて、こう言っています。「2:7 不法の秘密はすでに働いています。ただし、秘密であるのは、今引き止めている者が取り除かれる時までのことです。」

そこで、反キリストの霊というものを、もっと具体的に考えてみましょう。人として来られたイエスを告白しない霊です。イエスが肉体を取って来られたのではないとするのが、グノーシス主義の影響を受けた教えであります。イエスは、仮に現れた、仮現説と言いますが、肉体を宿していなかったと主張します。その背景に、霊は神のものであるが、肉は悪であるという二元論があるのです。もしイエスが肉体を取られたのであれば、善であるはずのイエスに悪が混じることになるので、それはあってはならないとするため、肉体は取らなかったと教えるのです。そして、その霊の部分のみ、霊の知識のみで神に近づくのだという教えです。

そのために、これまで第一の手紙を見てきて分かったかと思いますが、物理的にいる兄弟たち、仲間をないがしろにするのです。彼らと自分がつながっているということを思っていない。「2:19 彼らは私たちの中から出て行きましたが、もともと私たちの仲間ではなかったのです。もし仲間であつたなら、私たちのもとに、とどまっていたでしょう。しかし、出て行ったのは、彼らがみな私たちの仲間でなかったことが明らかにされるためだったのです。」それこそが兄弟を憎むということであり、単に兄弟のことで腹を立てることではありません。もちろん腹を立てたら、主の御霊に満たされるよう祈るべきですが、グノーシス主義者らは、「私たちは隠れた知識を明らかにされた。これこそが真理だ。あの人たちにはまだ隠されている。」としています。肉体において敬虔に生きようとしているのが、私たちキリスト教会です。けれども、肉体の弱さがあります。そこには人間臭さがありま

す。そうしたところを悪として、裁き、それで真の信仰はこれであるということを、滔々と主張します。

当時、グノーシス主義の異端がどういう形で来たかと言いますと、正反対のように見えます。一つは禁欲主義です。肉体における営みがすべて悪であるとみなします。先ほど、キリストが肉において現れたのが、敬虔の奥義だとパウロが第一テモテで話したことを読みましたが、その続きに、悪霊の教えがあることを教えています。「Ⅰテモ 4:1-3 しかし、御霊が明らかに言われるように、後の時代になると、ある人たちは惑わす霊と悪霊の教えとに心を奪われ、信仰から離れるようになります。2 それは、良心が麻痺した、偽りを語る者たちの偽善によるものです。3 彼らは結婚することを禁じたり、食物を断つことを命じたりします。しかし食物は、信仰があり、真理を知っている人々が感謝して受けるように、神が造られたものです。」もう一つはその反対で、性的放縱になってもどうなっても、それは霊に関することではないから、関係のないことだとすることです。「Ⅱテモ 3:5-7 見かけは敬虔であっても、敬虔の力を否定する者になります。こういう人たちを避けなさい。6 彼らの中には、家々に入り込み、愚かな女たちをたぶらかしている者たちがいます。その女たちは様々な欲望に引き回されて罪に罪を重ね、7 いつも学んでいるのに、いつになっても真理を知ることができません。」一方では禁欲主義で、もう一方では放縱です。

肉体において起こること、具体的な兄弟たち、またこの世で起こること、そこにはどんなに善と呼ばれても、完全なものはありません。ですから、グノーシス主義者のように、それは悪だからと退けて、ありもしない理想を掲げる誘惑があります。しかし、キリストは肉体をもって現れました。その不完全な世界に入って下さりました。そして、ユダヤ人宗教指導者らが妬みによってイエス様を十字架に付けるように仕向けましたが、それをさえ神はご計画の中に入れられており、全人類の罪の供え物とすることだったのです。悪をさえご自分の栄光に用いられるのですから、私たちは、目に見えることにおいて起こっていることを、完全に善悪で判断することはできないのです。大事なのは、地に足の着いた生活をする、敬虔にかなう生活を地道にしていくことです。

2B 今の世

^{3b} **あなたがたはそれが来ることを聞いていましたが、今すでに世に来ているのです。**

先に引用した 2 章において、また、テサロニケ第二 2 章において、「不法の秘密」という形で、今すでに世に来ていることを教えていました。私たちは、終わりの日にこうした敬虔にかなう教え、イエスを信じて、兄弟を愛するという生活から離れて、自分たちの理解にかなう、耳障りのよいものに引き寄せられることから気をつけたいといけません。終わりの日とは、将来に現れる不法の人だけではなく、今も教会に対しても巧妙に忍び込んでくる、異端的動きもあります。最大の防御は、単純です。キリストに留まること。この方との人格的、霊的な交わり。そして仲間を愛すること。この二つです。御子を信じることと、兄弟を愛することが神の命令です。